

2010年
12月1日
水曜日

大学生の「本離れ」が指摘される。インターネットや日々進化する電子書籍によって、活字を読む手段が多様化している。書店最大の紀伊国屋書店も紙の本と電子書籍の両方を扱う電子書店を開設するという。今や、本を手に取り、紙のページをめくらずとも、情報を得たり、物語や長編小説を読むことができるのである。英語の授業を例に取ってみても、紙の辞書を手に行っている学生は皆無と言ってよい。ほとんどの学生が電子辞書や携帯を頼りに単語の意味を調べている。その光景は、手に馴染んだ紙の辞書を使って学生時代を過ごした私を時折寂しい気持ちにさせる。

「書物愛」、「愛書家」の伝統の中にウィリアム・モリス（1834-1896）を位置付けることができる。ウィリアム・モリスは、今から150年ほど前、イギリスのヴィクトリア時代において多彩な創作活動を行った芸術家、社会主義活動家である。一般によく知られているのは、自然をモチーフにした彼の美しいテキスタイルデザインであろう。また、2009年に開かれた「アーツ&クラフツ展」のポスターに記された印象的なモリスの言葉——「役に立たないもの、美しいと思わないものを、家に置いてはならない」を覚えていた人もいるかもしれない。そのモリスが生涯最後の仕事として力を注いだのが書物工芸であった。彼は、当時の機械印刷によって大量生産された醜い本を批判し、自らケルムスコット・プレスを設立して「理

森田 由利子 准教授（イギリス文学、ライフ・ライディング）

ウィリアム・モリスの理想の書物

想の書物」を製作した。書物蒐集をも再開した晩年のモリスは、文字通り「本」に囲まれて過ごしたのである。では、モリスにとつての理想の書物とはどのようなものであったのだろうか。彼の講演やエッセイなどから、モリスが中世の時代に作られた彩色写本や初期印刷本を「美しい」とみなしていたことがわかる。それらは、活字の美しさにおいて秀でており、機械ではなく、確かな技術に基づいた手仕事で作られたものである。また、彼が描いた散文ロマンスの作品群を読むと、モリスが理想とした書物のさらなる特質が見えてくる。まず、本は大切に受け継がれていく存在として描かれる。それ故、次世代への継承に耐えうるしつかりとした造りが望ましい。そして何より重要なのは、モリスの描く書物は、自然や大地と融和する存在だと

いうことである。物語の中で、本はその開いた頁に葉陰が落ちるような自然の中で読まれている。また、本の中に山や海といった自然そのものが内包されている場合もある。ウィリアム・モリスがより良き書物を作るために、材料を吟味したことはよく知られている。手漉きの紙や木版画、ヴェラムの装幀など、ケルムスコット・プレスの本からは、木や土の香り、手触りが感じられるようである。手仕事による丹念な製作、受け継がれていく存在、自然や大地との融和——こう並べて考えてみると、モリスの「理想の書物」は、電子書籍の対価を成しているように思える。インターネットや電子書籍の利便性を活用しつつ、学生の皆さんには、是非「書物愛」の伝統について思いを致し、本を手にとってもらいいたいと思う。